

Geo-Communication

ジオ・コミュニケーション NL No.5

ジオ・コミュニケーション ニュースレター (=NL) No.5

ヴェーバーはなぜ自然を語らなかったのか (2)
— 『職業としての学問』 1 —

ジオ・コミュニケーションとは、ある事象に関して、「場所」についての何らかの合意があるようなコミュニケーションを意味します。

ジオの語源は、英語の geography のギリシャ語 γεωγραφία (=geographia) の接頭語である γεω (=geo) にあり、地球、土地、土壌などを意味します。

コミュニケーションは、ラテン語の communicare を語源としますが、一つにする、まとめる、つきあう、交際する、行き来するなどの意味が含まれます。

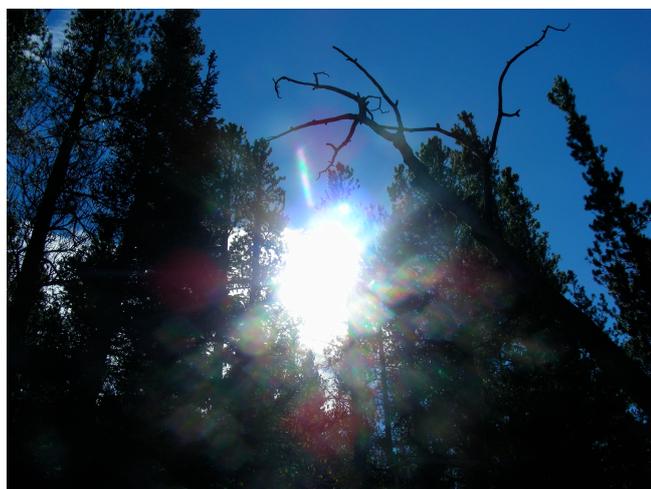
「一緒に」を意味するのが communis であり、フランス語の commune (共同体)、英語の community の語源となっています。

デジタル雑誌である「ジオ・コミュニケーション」では、主に話題提供を行う「ニュースレター」 (=NL) と個別の論文である「ワーキング・ペーパー」 (=WP) の二種類を公刊していく予定です。

なお、発行元は、香川大学を本拠としている「地球ディベロプメントサイエンス国際コンソーシアム」 (=ICEDS) が運営している環境史研究プロジェクトです。

香川大学アーツ・サイエンス研究院教授

村山 聡



Rocky Mountains, Colorado, USA,
October 4, 2007

連絡先：香川大学 アーツ・サイエンス研究院 村山 聡
住所：香川県高松市幸町1-1 香川大学
電話/Fax: 087-832-1571
Email: muras@ed.kagawa-u.ac.jp
URL: <http://rfweb.ed.kagawa-u.ac.jp/project/wiki/muras/wiki.cgi>

ヴェーバーはなぜ自然を語らなかったのか（2） — 『職業としての学問』 1 —

香川大学アーツ・サイエンス研究院教授 村山 聡

マックス・ヴェーバーの著名な講演である「職業としての学問」と「職業としての政治」は第一次世界大戦中と大戦後になされた。

ミュンヘンの自由学生団の依頼による「職業としての学問」と題した講演は1917年11月7日に行われた（今野元『マックス・ヴェーバー』東京大学出版会、2007年、352頁）。1914年から1918年にかけての4年間、ドイツの勝利を念じて続いていた（今野、同書、301頁）ヴェーバーは、敗戦後の1919年1月28日には「職業としての政治」と題した講演を行い、1919年6月からミュンヘン大学国家学部の常勤正教授として本格的に教育活動を再開した。神経症のための教育活動の中断期間は20年近くに及んでいた。

まずはヴェーバーの時代の大学の位置づけについて、基本的な知識が必要であろう。1864年4月21日にドイツ、チューリンゲン州のエルフルトで生まれたヴェーバーは、元々政治家志望であったことが伝えられている。ハイデルベルク大学、シュトラスブルク大学、ゲッティンゲン大学、ベルリン大学などで7年間の学生生活を送り（今野、同書、37頁）、1889年にベルリン大学で法学博士号を取得している。

現在のベルリンには総合大学が二つある。一つはベルリン・フンボルト大学であり、もう一つはベルリン自由大学である。東西ドイツが分断されていた時代、ドイ

ツ民主共和国（通称東ドイツ）側の東ベルリンに存在したのがフンボルト大学であり、1810年創設の大学である。この大学は、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世（プロイセン王1797年～1840年）によって設立されたプロイセンの大学であり、当時は「フンボルト」という冠はついていなかった。もちろん伝統のある大学ではあるが、他の多くの数百年以上の伝統のある大学に比べれば新参者である。多くの教科書的な大学史叙述では、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世によるベルリン大学の設立が近代的な大学の始まりだと説明し、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767-1835）の理想である「教育と研究の一体化」の実現と評される。しかし、最近の議論では「フンボルト理念＝神話説」が主張され（潮木守一「フンボルト理念とは神話だったのかーパレチェク仮説との対話ー」『大学論集』広島大学高等教育開発センター、第38集（2006年度）、2007年3月、171～187頁）、フンボルト構想は実際はアメリカで実現されたとされている。

フンボルト大学と異なり、ベルリン自由大学が設立されたのはずっと時代を下った1948年のことであった。第二次世界大戦後、東側ドイツはソビエト連邦の管理下に置かれたのであるが、西ベルリンだけは、アメリカ合衆国の占領地となっていた。ソビエト連邦の支配下にあるフンボルト大学を抜

け出し自由な学問世界を欲した学生や教員によって、そしてアメリカ合衆国やベルリンの政治家の支援によって設立されたのがベルリン自由大学であった。

ヴェーバーが卒業したのは、もちろん、ベルリン・フンボルト大学である。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、哲学者であるヨハン・ゴットリーブ・フィヒテや哲学者でもあり神学者でもあるフリードリヒ・シュライエルマッハーらの影響を受けつつ大学の創設を実現していった。

現在のベルリン・フンボルト大学という名称で、「フンボルト」が付されている理由は、このヴィルヘルムだけではなく、彼の弟アレクサンダー（1769-1859）のこの大学への貢献が大きい。彼は、自然科学者として著名であり、博物学者、探検家そして地理学者であった。アレクサンダーは、プロイセン教育大臣、内務大臣そして言語学者である兄のヴィルヘルムと共に新設大学の発展に貢献した。ドイツの研究者支援組織で有名なフンボルト財団は弟のアレクサンダーに由来する。アレクサンダーの方は、鉱山業などに関係する国家官僚の職を引き受けていた時代もあったが、次第に自然科学系の研究生活に専心するようになっていった。

この二人の兄弟の名前に由来するフンボルト大学は、まさにプロイセン国家の発揚期に作られた国策的な大学であった。その後、

フンボルト大学は29人ものノーベル賞受賞者を輩出している。物理学者、化学者そしてロベルト・コッホなどの医学者たちである。

1810年設立のフンボルト大学がプロイセンの大学として登場して来たのは、科学技術が国家との結びつきを強めた時代であった。その後、1871年のドイツ国家成立の後、ベルリンは首都として、知の中心地として中央集権的な傾向を強めることになる。出版業界や出版物の中央集権化が進んだ。19世紀以前そしてナチス崩壊後の戦後西ドイツの分権的文化世界とは大きく異なる中央集権的国家主義的文化の象徴がフンボルト大学であったと考えられる。ヴェーバーはベルリン大学での博士号取得後、1891年に教授資格論文「ローマ農業史」を提出し、1892年に同大学の私講師となり、ローマ法や商法の講義を行った。

ヴェーバーは、「職業としての学問」の講演冒頭で、自分の学者としての位置づけを明確にしている。国民経済学者 Nationalökonom と自分を呼んでいる（マックス・ヴェーバー『職業としての学問』岩波文庫、尾高邦雄訳、1980年改訂版、以下「邦訳」、9頁では「経済学者」と訳されている）。ドイツ国民国家の行く末を案じていたヴェーバーならではの位置づけである（今野、同書、78～79頁）。1895年5月13日に行われたフライブルク大学での「国民経済学」担当正教授就任講演は「経済学における民族性」（後に「国民国家と経済政策」と解題）であった。

他方で、「職業としての政治」という講演はあまり乗り気がなかったとされるが、「政治家は妥協するのが義務だが、学者はそれに一線を画するべきである」とするヴェーバーを「政治へ燃える情熱にも拘らず遂に政治的学者で終わったのは、彼の能力に体する周囲の無理解のためばかりではなく、『職業としての政治』に対する自身の違和感もあってのことだった」と今野は指摘する（今野、同書、357頁）。その意味では、「国民経済学者」と自ら位置づけるヴェーバーに意外性はない。しかし、ヴェーバーの著作をそれぞれ独立したものとして読む読者にとっては、ヴェーバーはなぜ「国民経済学者」だったのかという疑問への答えも欲しい。

「国民経済学者」ヴェーバーに対して、彼は「自然」をいかに語ったのか、という問いかけは、ヴェーバーの生活と作品との関係を考える重要な契機になると筆者は考える。ただ、ヴェーバーの生活を語ることに、ヴェーバーの作品を語ることにの間には、やはり大きな隔りがある。

個人の生活における感情や意思に影響を与える情報と学術作品の根拠付けのために使われる情報が同質のものであると考えることは難しい。ヴェーバーを理解することと、それぞれの作品を理解することとは切り離れた方がいいのではないだろうか。

さらにヴェーバーは地球環境問題が顕在化した現代に生きているわけではない。地球規模での政

策課題が「自然」との関係で問われるような時代ではなかった。「自然」の理解が異なるのである。その意味では、2005年に公刊されたヨアヒム・ラトカウの著作がすでにヴェーバーと自然との関係を明らかにしていると理解されるかもしれない。

Joachim Radkau, *Max Weber: Die Leidenschaft des Denkens*, München-Wien: Carl Hanser Verlag, 2005

しかし、今野も指摘しているように、ラトカウの著作はヴェーバーの全体像を描こうとしたために、網羅的となり論旨に不十分な点も見られる（今野、同書、373頁）。また、ヴェーバーの生活と作品の間のミッシングリンクが「自然」であるとしても、ラトカウの議論はヴェーバーの「生活」に重心が置かれすぎているというピーター・トーマスの批判的を射ているように思う。

Peter Thomas, "Being Max Weber", *New Left Review* 41, September-October 2006, pp. 147-158, p.155

今やヴェーバーについては、今野の著作もあり、ラトカウの著作もあり、またさらに以前のものとしてはモムゼンの著作もある。

Wolfgang J. Mommsen, *Max Weber und die deutsche Politik 1890-1920*, 2. Aufl., Tübingen: J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), 1974

ヴェーバーを語るためにヴェーバーの著作を読むのではなく、ヴェーバーの著作を道具（歴史資料）としてさらに新たな論点を析出できないであろうか。そのためには、ヴェーバーの著作で使われている資料や情報に関する綿密な

歴史的検討が必要であると考え、ここでも「比較史料学」の方法は有効である。

比較史料学の方法というのは、残された書かれている資料を分析する場合、その資料から抽出することのできる情報をそれ自体として分析するだけではなく、その資料自体の存在理由からも分析を行う方法である。多様な歴史資料の存在を前提に、その存在そのものを分析する必要性のあることを筆者は主張している。

ヴェーバーの「職業としての学問」についても、ヴェーバーが根拠としている多くの事実が議論の前提となっている。ヴェーバーが通った大学そしてヴェーバーが教えた大学を考えるのと同じように、その一つ一つを分析してみることに価値がある。歴史資料として「職業としての学問」を取り扱い、同時に現代の歴史研究における他の研究成果や現代社会の諸問題との関連を明らかにすることにより、新たな論点を提起できる。

ヴェーバーは自分を「国民経済学者」として位置づけていることは指摘した。まず第一に、この「国民経済学」という存在が問われる必要がある。ヴェーバーは、1918年に54歳となっており、1918年の春、ウィーン大学でほぼ20年ぶりの特別講義に臨んでいた（今野、同書、297頁）。ウィーン大学で毎週月曜日に1時間行われた講義は、「経済と社会」と題され、「史的唯物論の積極的批判」という副題が付されていた（今野、同書、298頁）。その後、ウィーン大

学での社会学正教授への招聘を断り、1919年6月にはミュンヘン大学国家学部で教育活動を開始した。その後、1920年5月に同学部における夏学期が本格的に始まり、「国家学」と「社会主義」と題する講義を行っていたが、同年6月初頭に気管支炎を煩い、6月14日に56歳の生涯を閉じる（今野、同書、357頁）。第一次世界大戦、そしてドイツの敗北後、「ドイツの政治的新秩序」（1918年11月4日の講演）に向けた激動の時代にその生涯を終えた。国家学部の存在そして国民経済学者という位置づけは、この時代背景を抜きにしては語ることができない。大学史という文脈における「国家学部」の存在事実、経済学史の文脈における「国民経済学者」という存在事実がヴェーバーを相対化するために問われる必要がある。

「職業としての学問」の講演では、「生計の資を得る道としての学問はいまいかなる状態にあるか」（邦訳、9頁）という問いかけから始め、アメリカ合衆国とドイツの当時の大学事情との対比を示している。「私講師」から大学人としての経歴が始まるドイツと「助手」としての任命から始まるアメリカの違い、ドイツでは「金権主義的前提」の上に立っているのに対して、アメリカは「官僚主義的組織」であるとする。この対比を考える上でも、ミュンヘン大学における国家学部成立についてはさらに検討が必要である。この点は、いずれまた稿を改めて論じたいが、「ヴェーバーはなぜ自然

を語らなかったのか」という設問との関連で重要なのは次の文章である。

「ところで、最近におけるドイツの大学制度をみると、だいたいにおいてこのアメリカ的傾向に近寄りつつあるということが出来る。こんにち、ドイツの医学や自然科学系統の研究所の大きなものは、すべて『国家資本主義的』事業である。これらの事業は、もとよりぼう大な資金や設備がなくては営まれえない。そこで、一般に資本主義的経営にはつきものの例の事情がここにも生じる。『労働者の生産手段からの分離』というのが、それである。労働者つまり、ここでいえば研究所助手は、国家から貸し与えられた労働手段に全く依存しなければならない。そしてまた、ちょうど工場主に対する工場労働者のように、研究所長にも依存していることになる。なぜなら、研究所長は、当然のこととして、研究所は『自分の』研究所であると考え、したがってかれはそこの支配者だからである。かくて、研究所助手はしばしば『プロレタリア』のように、そしてまたアメリカの大学助手のように、不安定な立場におかれるのである。」（邦訳、13～14頁）

この国家資本主義と科学技術との関係は、技術進歩と科学研究・教育体系の組織化との関連において、実に複雑な歴史を有している。

(つづく)